別記様式第２号-1（第５条、第１０条、第１９条、第２４条関係）

学　位　論　文　の　要　旨

氏　　名	松﨑　大嗣
学位論文題目	成川式土器の研究

本論文の目的は，九州南部の古墳時代から古代初頭の土器様式である「成川式土器」の終焉プロセスを実証的に解明することである。

先行研究では，成川式土器の終焉と古代土師器の流入については断絶が大きく，律令制普及に伴う様々な諸制度の導入や移民政策など，一方的な社会転換が想定されてきた。そして，当該期の社会変化プロセスには空白や断絶が予想され，「謎の7世紀」（中村和1996：p. 188）、「空白の奈良期」（中島2010：p. 43）などと呼ぶこともあった。

第１章では，先行研究を整理した。その中で，成川式土器は，地域差を持ちながら７～９世紀の間に終焉を迎えることが考えられており（下山1995，中村2015），後続する土師器に変化することが推測されてきた。しかし，「成川式土器の終焉」プロセスを実証的に解明した研究はこれまで無く，終焉を迎える様相や社会変化の実態を捉えるために，第２章において４つの研究の柱を提示した。

第３章では，本論で使用する時間軸の基盤を構築するために，成川式土器の分類と編年をおこなった。対象時期は弥生時代後期から平安時代前半まで，対象資料は九州南部から出土した成川式土器を用いた。属性分析を用いた分類および型式組列の作成を通して，松木薗式・高付式→中津野Ⅰ・Ⅱ式→東原Ⅰ・Ⅱ式→辻堂原式→笹貫Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式→敷領式という10期編年を提示した。

第４章では，成川式土器を用いた調理技術の復元をおこなった。土器に付着したスス・コゲを用いた土器使用痕分析をおこなった結果，弥生時代後期から笹貫Ⅱ式段階において，湯取り法炊飯を伴うオキ火上転がしを行っていることが明らかとなり，成川式土器の調理に炊飯を伴う痕跡が確認された。また，「九州南部型甑」に付着したスス下端径となどを計測して，「炉を使用した蒸し調理」の実態を明らかにした。この調理技術は，近年，東北地方日本海側でも確認されており（小野本2021），古墳築造域の縁辺部における蒸し調理の変容形態であることを論じた。

第５章では，成川式土器編年で最終段階に位置づけられる敷領式の年代を検討するために，開聞岳の火山噴出物である「紫コラ火山灰」の降下年代を考古学および自然科学的手

法を用いて検討した。結果，紫コラ火山灰によって埋没した建物跡や直下の包含層から出土した遺物の帰属年代は，８世紀後半から９世紀前半に位置づけられるものであり，放射性炭素年代測定による分析結果も同様の値を示した。今後，関連諸分野の研究をもとに災害年の再検討を行う必要があることを課題とした。

第６章では，近年の発掘調査の成果をもとに九州南部における古代遺跡の概要を説明し，当地域の古代社会における大きな画期である窯業生産について整理を行った。その上で，南さつま市に所在する中岳山麓古窯跡群に着目し，分布調査を通して，生産規模や器種，流通範囲について考察を行った。結果，中岳山麓古窯跡群は，同時期における九州南部最大の須恵器窯跡であることがわかり，甕・壺といった貯蔵具類だけでなく，椀といった供膳具も生産されていたこと，須恵器にみられる当て具などの製作具痕跡から，複合的な技術導入の可能性を指摘した。中岳山麓窯跡群のような大規模な生産体制を構築するためには，専業工人の介入や入植は不可欠であり，９世紀段階において「在地伝統」的集落や土器生産体制への影響は大きかったことを考えた。

第７章では，これまでの検討結果を基礎にして，成川式土器の終焉プロセスを明らかにするために，笹貫Ⅰ式から敷領式にかけての「在地伝統」的要素をもつ集落動態と，「律令制国家」的要素をもつ集落や施設の普及状況を比較した。笹貫Ⅰ式段階では，基本的に古墳時代からの伝統を引き継ぐ「在地伝統」的要素をもつ集落のみで構成されていた。

続く笹貫Ⅱ式段階では，成川式土器を主体とする集落が分布範囲を狭め，指宿地域と大隅半島地域に限定されるようになる。一方で，北薩地域や鹿児島湾奥部，薩摩半島西岸域では，集落の存在が希薄となる状況が確認された。笹貫Ⅲ式段階になると，成川式土器の分布圏はさらに狭まり，指宿地域と志布志湾沿岸部に限定されるようになる。また，器種構成にも変化が起き，煮沸具は在地伝統をもつ成川式土器，供膳具は土師器や須恵器に置き換わる現象が認められる。

笹貫Ⅲ式における大きな変化は，７世紀後半に大島遺跡，８世紀前半に京田遺跡や柳ガ迫遺跡，城ヶ崎遺跡といった国府・国分寺周辺の集落が出現することである。この地域は笹貫Ⅱ式の段階で，明確に在地集落を確認できなかった地域であり，ある程度の集落断絶を挟んで「律令制国家」的要素をもった「類型Ⅲ」に位置づけられる集落が出現したと考えた。最終段階の敷領式段階では，「類型Ⅲ」にあたる集落が九州南部の広い範囲で見られるようになる。在地伝統を残す地域は指宿地域のみであり，その伝統も脚台甕にみられるだけになった。薩摩半島西岸においても，中岳山麓古窯跡群が成立するなど，窯業生産の確立や流通網が発展した。このような社会動向の中，成川式土器の伝統を最後まで存続させていた指宿地域においても，９世紀に起こった開聞岳の火山噴火によって，その伝統

は失われることになった。

本論の分析によって，社会変化のプロセスには，薩摩・大隅国府周辺の「急進型」と，指宿地域や志布志湾沿岸の「漸進型」の２つの社会変化系統があり，土器様式の断絶や征服的な土器様式の転換は明確に認められず，在地伝統と新来文化のバランスを保ちながら段階的に対応していたことを明らかにした。